

岡山の文学

—平成8年度岡山県文学選奨作品集—

ヒト骨髄腫細胞株の樹立

— 樹立者から細胞へ —

大槻剛巳

君さえも知らない

科学は 仁術足り得ず

医術は 技術の中に埋もれ

それでも 信頼という美名の基

僕達は 時を忘れ

生活を求めるために 生活を殺し

より以上の 生きざまを抹殺していれば

それを 人命と呼んで欲しい

君さえも知らない

選択は 希望ではなく

快諾は 眼前の評価に隠され

それなら 真理という旗頭に

虚栄と 快楽と 榮譽を潜め

自分史を彩る 生よりも 性よりも

より以上の

死とは呼べないほどの 骸の山

君は 僕達にとっての無知と

君にしてみれば

あざけり得る程の
粗雑な薬剤を見透かすように
そして

増殖が無限であれば

人体の有限の境界を越えて

それは 単に新しい宇宙

否

君にとっては

環境は君に絶対の従属を表し

言葉にするほどもない

ただ 遺伝子の指令のままに

複写されていく

君さえも知らない

歓喜は 単に君の増殖でしかなく

発表は 徒らに君を紹介するばかりで

そのうえ 時代はこの邂逅でさえ

輝かしい業績とは 認知してはくれない

それでも僕は

君のなかに潜む

癌遺伝子活性化や 癌抑制遺伝子変異や

情報伝達経路や

化学物質による細胞自殺を調べ

そして

君には何を求めれば良いのだろうか

君は 何も知らず

増え続けることの意味さえも

知らないであらうに

ヒト骨髓腫細胞株の樹立

—細胞から遺伝子へ—

いつのまに

お前達は俺の中に入り込んできたのだろうか

名前さえも忘れてしまった老女の

ヒトが胸腔液と呼ぶ

あの居心地のよかった

すこし粘り気のある波間の中から

気が付けば 漆黒の闇と

シューシューという

炭酸ガスの吹き込む音以外には

何も認識できない

この四角張った箱の中へ誘拐されて

おまけにここには

ウシの蛋白ばかりで

奇妙なワインレッドの溶液しか目に入らない

いつのまに

お前達は俺の中に入り込んできたのだろうか

ここでも仲間を作って増殖しようとするのは

これは俺の意志だ

万が一にも

時々 緑の光の中で俺をのぞき込んで

完成させるべき論文や発表原稿の草案を

ブツブツと唱えている

微妙に徒勞を白衣に隠している

訳知り顔の

アイツの実力ではあろうこともなく

ひたすらに

俺が俺であり

仲間と共に支配欲に撞き動かされて

そこらじゅうを

俺の分身で埋め尽くしたいと渴望している

その俺の意志のはずだ

抽出された核酸が

引きずり出された遺伝子が

まるで

真理は我が手の内にあるとでも云うように

その隠された

おどろおどろしい顔貌を露わにしてくる

人々は科学の名の基に

悪性化解明に日夜取り組んでいるが
それさえも 単に
すこしお披露目をしようかという
遺伝子の悪戯心でしかない

いつのまに

お前達は俺の中に入り込んできたのだろうか

俺は厭だ

俺が 単に

お前達を運ぶ乗物でしかないなんて事實は
それでも 明日もまた俺は増殖したい
相同の目付きの悪い顔立ちの

俺の仲間で世界を埋め尽くしたい
そう

あの居心地の良かった老女の命さえ
軽々と吹き消すことが出来たではないか

これは俺だ

俺の意志だ

もうお前達は出て行ってくれ

お前達が居なくても

俺は増殖をやめはしない

ヒト骨髄腫細胞株の樹立

— 遺伝子から樹立者へ —

私の意志が貴方を支配するのです

それは ただの偶然でしかありません

貴方が あの老女の腰痛から

多発性骨髄腫という病名を紡ぎ出し

丹念に慎重に化学療法を施行し

それでも

彼女は人生の幕を降ろしてしまいました

骨髄腫細胞は骨髄ばかりでなく

胸腔にも浸潤し

貴方の知識では救いようも無かったでしょう

そして

それも幸運としか呼びようがありません

あの骨髄腫細胞が

孵卵器の中で

その上

工夫のない 10%FBS加 RPMI1640 の中で

著しい増殖能を示したことも

あるいは myc と呼ばれる

私の一部からメチル基が逸脱していたことも

貴方が少し意欲を見せていたから

私の気まぐれが

少しだけ微笑みを見せたのです

神などと

貴方がたの言葉で呼ばないで下さい

混沌の海よりの生誕の嵐が

実は静謐の中で

必然として構築された有史以前より

私は

全ての有機を彩り

万能の法則を

おしなべて

生物に供与し続けているのです

もうすこし 見つめてあげましょうか

貴方が骨髄腫に特異的に発現されている

私の極々一部を同定するまで

もうすこし 微笑んでみましょうか

貴方が細胞自殺の機構の破綻を

あの細胞株に応用するまで

貴方が業績を残して行って

科学と医術を気持ちの中で統合し

生活の中に自らの生きる喜びを

家族と仲間と細胞と

生命の尊さの融合の果てに

感じられるその時まで

ただし 忘れてはなりません

私の意志が貴方を支配するのです

選外秀作二席「ヒト骨髄腫細胞株の樹立三編」は、テーマとして取り上げられた対象が、人間の生命の基本的な仕組みを、科学的且つ専門的立場から詩にしたもので、極めて特異な作品といえる。この三編に接することで、一人の人間には無数のいのちが有り、それをまとめて生命と呼ぶことが認識される。又、生命の神秘を遺伝子まで透視し、既存のロマンチズムや情緒を超えた乾いた言葉で表現するなど、従来の題材を超えた新しい分野の提示となっている。